

特集・「新天体発見事情」

山 縣 朋 彦

〈2001年秋天文教育フォーラム実行委員／文部科学省・初等中等教育局〉 e-mail: yamagata@ioa.s.u-tokyo.ac.jp

山 岡 均

〈天体発見賞選考委員会委員長／九州大学〉 e-mail: yamaoka@rc.kyushu-u.ac.jp

中 野 主 一

〈IAU小惑星センターアソシエイツ／ダイニック・アストロパーク天究館研究員〉 e-mail: nakano@oaa.gr.jp

櫻 井 幸 夫

〈新天体探索家〉 e-mail: y-sakurai@msb.biglobe.ne.jp

高 見 澤 今 朝 雄

〈新天体探索家〉 e-mail: k-takamizawa@nifty.ne.jp

□ 現代新天体発見事情

山縣朋彦

彗星・新星・超新星等が毎年数多く発見されています。その大半は研究機関や大学に所属しない在野の天文家（いわゆるアマチュア）の活躍によって、発見されています。多くの天文学会の会員にとっては、毎年春の年会の総会で、これらの天体を発見した方に対して行われる、天体発見賞・天体発見功労賞の授賞式が唯一の接点で、その生活や考え方を知る機会はありませんといえなかったと思います。そこで、少しでもそのギャップを埋められればと思い、今回は3人の方にそれぞれの生活ぶり等について述べていただきました。

この特集記事は、2001年10月6日、兵庫県姫路市で開催された秋季年會中に開催された天文教育フォーラム「現代新天体発見事情」で講演していただいた方々に、講演内容を元に書き下ろしていただいたものです。日本天文学会では、毎年春の年會で、彗星・新星・超新星等を新発見した天文愛好家（いわゆるアマチュア）に対して、天体発見賞・天体発見功労賞の授与をしています。それらの新天体発見に携わってきた人たちが、どのような生活をおくっていて、何を考えているのかを知りたいと言うことで、このフォーラムは企画されました。

まず、天体発見賞選考委員会委員長の山岡均さん（九州大学）に、天体発見賞設立のいきさつと、天文学会としての発見賞の考え方と実状についての解説をしていただいています。続いて、中野主一さん、櫻井幸夫さん、高見澤今朝雄さんの3人の

方々に、天体発見生活の実態と、それを支える個人生活について説明していただいています。それぞれの方たちの個人的な業績については、既にいろいろところで紹介されていますので、省略させていただきます（簡単なものは天文月報2002年1月号雑報、及び日本天文学会会員名簿の巻末「天体発見賞・天体発見功労賞受賞者一覧」を参照してください）。

ここに書かれている内容を見ると、単なる道楽と切り捨てるには程遠いエキスパートの姿がありません。その方法論も研究者と比較して、遜色はありません。違いは成果の発表方法と生活基盤の違いくらいでしょうか。特に生活基盤については、目的のために人生設計そのものを変えてしまう人もいます。ですので、その点では一般の研究者（いわゆるプロ）以上かもしれません。まさに、その活動は単

なる愛好家とか趣味人でかたづけられない、人生をかけた壮絶なライフワークとなっていることに驚きを禁じ得ません。一般の研究者と比較して、その向いている方向がやや違っていますが、天文学ないしは人類の文化に対する貢献は同等であると考えるとよいでしょう。

今回は3人の方しか紹介できませんでしたが、まだまだ、多くの興味深い経歴・経験をお持ちの

“アマチュア”がいるはずで、出来るものなら、ほかの人達の様子も知る機会を作れないものかと思えます。

今回、このような企画で天文教育フォーラムで、快く講演していただき、且つお忙しいところ原稿を寄せていただいた皆さんには、フォーラム実行委員を代表して感謝の意を表したいと思います。

□ 新天体の発見と天体発見賞・発見功労賞

山岡 均

2001年秋の年会の天文教育フォーラムでは、天体発見にまつわる話を集められました。最初に、日本天文学会が制定・授与している天体発見賞・天体発見功労賞について、簡単に紹介させていただきました。

1. 天体発見賞の歴史

日本天文学会が社団法人となったのは1935（昭和10）年1月です。それに伴って定款が定められたのですが、第5条には「本会は天文学の進歩および普及に特別の功労ありと認めたるものには総会の議決に依り其の功績を表彰することあるべし」とあります。これ以前の会則には表彰の字句はなく、業績を表彰する機運が高まっていたものと見られます。

そうしたところに、翌1936（昭和11）年の6月18日、五味一明氏がとかげ座に新星を発見、続いて7月17日には下保茂氏が彗星を発見されました。五味氏は長野在住で流星や変光星の観測を精力的に行なわれていた方で、北海道へ日食観測に遠征中の発見でした。一方、下保氏は当時東京天文台勤務で、変光星観測中に発見されたものです。この2つの発見を表彰するため、亡くなった学会会員間島道彦氏の御遺族から1924（大正13）年に学会が受けていた寄付金を使用することとなり、両者に書状と金一封が送られました。

これらの表彰が臨時総会で議決される直前の1936（昭和11）年10月4日、岡山在住の岡林滋樹氏がいて座に新星を発見されました。相次ぐ発見に対し、天体発見賞を制定することとなり、また服部玄三氏から天体発見奨励のためとする寄付をいただきました。この寄付を用いた賞は「天体発見服部賞」と称することとなり、細則が定められて岡林氏の表彰が行なわれるとともに、五味・下保両氏も加えた3名に賞牌（メダル）が送られました。これが最初の天体発見賞です**。

以後65年ほどの間に、天体発見賞・天体発見功労賞を合わせて延べ200件に迫る表彰を行ってきました。学会事務局の御努力で、授賞一覧が天文学会名簿の巻末にまとめられています。最新の名簿ではじめてこの表が編集されたので、いくつか誤りや不統一などが見られますが、次回の名簿ではそれらを修正したいと考えています。

2. 天体発見賞に関する細則

前章で述べたように、天体発見賞・天体発見功労賞は、天文学会の細則に基づいて贈られていま

* 原文は旧漢字旧カナ使い。

** これらの経緯に関して、フォーラムでの講演および月報先号（第95巻1号56ページ）での報告には誤りがありました。これをもって訂正するとともに、関係者の皆様にお詫びいたします。